企画展覧会

明治／大正／昭和前期の
いわて近代美術

五姓清吉《秋雲》1915（大正4）年　油彩・画布　100.0×79.8cm　萬鉄五郎記念美術館

≪会　期≫ 2020年12月5日［土］— 2021年2月28日［日］

≪入 館 料≫ 一般400［350］円／高校・学生250［200］円／小学生・中学生150［100］円　※［ ］内は20名以上の団体料金

≪休 館 日≫ 月曜休館（月曜日が祝日の場合その翌日）・年末年始（12/28～1/4）　≪開館時間≫ 8：30～17：00（入館は16：30まで）

≪後　援≫ 岩手日報社、岩手日日新聞社、盛岡タイムス社、河北新報社、朝日新聞盛岡総局、読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、産経新聞盛岡支局、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、花巻ケーブルテレビ、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、奥州エフエム、えふえむ花巻

≪主催／会場≫ 萬鉄五郎記念美術館　〒028-0114　岩手県花巻市東和町土沢5区135番地　TEL0198-42-4402／Fax0198-42-4405

萬鉄五郎記念美術館

明治／大正／昭和前期の
いわて近代美術

①

②

北東北に位置する岩手は、日本近代美術史において西欧彫刻の先駆者・長沼守敬、前衛絵画をけん引した萬鉄五郎、さらには詩情豊かな表現で魅了する松本竣介というように、数々の個性溢れる美術家を輩出してきました。そして今なお、この美術風土のなかで育まれ、触発された美術家たちが活発な活動を続けています。

明治にはいり西欧文化の受容に始まった日本の近代化は、美術においても例外ではなく岩手の地でも胎動し始めます。明治の初めに本格的な洋画を学んだ海野三岳を嚆矢として、そこから多くの洋画家が巣立っていきました。そして時代とともに表現スタイルも手法も多様化していき、岩手の美術家といっても一言では語れませんが、日本画家が極めて少なく洋画が大勢を占めているという地域特性があります。明治から大正、そして昭和へと激動の時代に活動した画家たちの多くは、在京、在郷を問わず美術団体を結成し互いに鼓舞しあいました。さらに、新たな造形表現を模索する彼らの姿は、次へと続く世代へ引き継がれていくことになり、戦後、全国に先駆けて設立された県立美術工芸学校に結実することになりました。

本展覧会は、明治から昭和の大戦期をめどに、地方で、または中央で活動していた岩手の美術家たちの痕跡を拾い集め、地方美術の歩みを振り返ってみたいと思います。

④

③

⑤

⑥

⑧

⑬

⑦

⑫

⑨

⑪

⑩

①長沼守敬《女性像習作》1882（明治15）年　鉛筆・紙 38.9 × 30.6cm
②海野三岳《昆タキの肖像》1904（明治37）年 油彩・画布 48.8 × 39.1cm
③田中貞三《新橋河岸》1912（明治45）年　油彩・画布 33.0 × 45.5cm
④真山孝治《農婦》1914（大正3）年 油彩・画布 70.5 × 38.0cm
⑤萬鉄五郎《夜の雪》1916（大正5）年頃 油彩・板 31.8 × 40.9cm
⑥阿部芳太郎《自画像》1923（大正12）年　油彩・画布 71.0 × 59.5cm
⑦及川文吾《ヒマワリ》1923（大正12）年　油彩・画布 130.2 × 97.0cm
⑧橋本八百二《人形を配せる静物》1926（大正15）年油彩・画布 72.7 × 90.9cm
⑨寺島貞志《女の顔》1930（昭和5）年 油彩・画布 91.0 × 73.0cm
⑩奈知安太郎《三人の裸婦》1938（昭和13）年頃 油彩・画布 141.0 × 110.0cm
⑪澤田哲郎《焼きいも屋》1941（昭和16）年 油彩・画布 31.5 × 40.8cm
⑫松本竣介《丸の内風景》
1942（昭和17）年 油彩・画布 38.0 × 45.5cm　花巻市博物館
⑬高橋忠彌《人間復活》1944（昭和19）年　油彩・板 162.1 × 97.0cm

≪同時開催≫

iwate コンテンポラリーアート vol.9-2

阿部龍一展

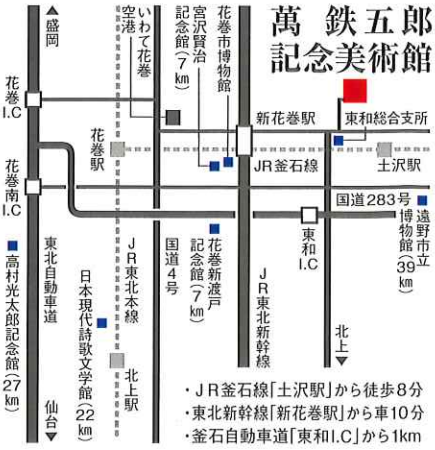
— うぶすな —

会期／12月5日～2月28日 9：00～16：30

会場／萬鉄五郎記念美術館 八丁土 蔵ギャラリー

入場料／無料

阿部龍一
《うぶすなⅢ》
2013（平成24）年
ミクストメディア



萬鉄五郎記念美術館

岩手県花巻市東和町土沢5-135 028-0114 TEL.0198-42-4402 /Fax.42-4405